

報告・資料

江馬修の著作年表と参考文献目録

－その開拓精神と多様な活動を中心に－

A Bibliography and List of References regarding Ema Shu :
Chiefly Concerned with Ema's Frontier Spirit and Wide Ranging Activities

天 児 直 美

はじめに

作家江馬修は、明治22年12月、岐阜県高山に生れた。田山花袋の影響を受け、自然主義運動の中で生れた作家である。出世作『受難者』は当時のベストセラーとなり、大正の一時期、一世を風靡した¹⁾。その後、関東大震災を転機に左傾してゆく。昭和7年、郷里高山に帰り、郷土研究誌「ひだびと」を発刊しながら、ライフワーク『山の民』－明治維新の時、飛騨で起った、梅村騒動と呼ばれる百姓一揆を扱った作品－の实地踏査を行う。昭和13～15年にかけて自費出版したが、その後も度重なる改作をくりかえし、実に40年を費やしている。しかし文壇では、政治的理由などから黙殺された。一方では、黒島伝治は「トルストイを読むような大きさ」と激賞²⁾。羽仁五郎は「世界でもいくつかの一つにかぞえられる名作」³⁾といい、大岡昇平は「作品の成立過程としても、文壇で受けた評価も異常である。そしておそらくわが国で書かれた最もすぐれた歴史小説ではないかと思うと、当惑は大きい」⁴⁾という。近年、芥川賞作家吉木本春彦氏は、「20世紀にかかれた世界の小説の中でも、第一級の作品である」⁵⁾と述べている。

江馬の晩年、筆者は江馬修との不思議な出逢いがあり、最期を看取った⁶⁾。そして遺言により、全著作権を継承することとなった。江馬の死後も、引き続き文壇では黙殺され続けているが、水面下においては、い

よいよ評価が高まってきている。旧作は次々と復刻されている。近年、アメリカ、アイオワ大学助教授（人類学者）シュコット・シュネル氏は、毎年来日され、その度に筆者宅を訪ね、『山の民』についての論文を発表されている。江馬の考古学・民俗学上の業績も再評価の気運が高まってきている中で、資料によって、その多様な足跡をたどってみるのも意義あることと思う。

江馬修著作年表

本名 江馬修（えま なかし） ペンネームく修（しゅう）・佐藤義男・赤木清・多志弥一・星野まもる他）

例 言

1. 本著作年表は、江馬修の著作を発表年代順に記した。
1. 著作は単行本、新聞、雑誌等に発表された小説、詩、戯曲、評論、随筆（感想）、論文、翻訳、アンケート、座談会、雑記などである。いずれとも判じがたいものもあったが、大よその見当で編者が種分した。
1. 江馬修以外の筆名は（ ）内に記した。江馬は自分はどこまでも作家であるとの理由により、考古学上は主として、赤木清の筆名で、民俗学上は当時の妻であった江馬三枝子（本名ミサホ）を前面に出

し、時には修が三枝子の名前で発表したり、共同執筆・三枝子単独執筆のものもある。区別がつかないので、今回は三枝子の名前で発表されたものは省略した。

1. 紙幅の関係上、1年ごとの改行とした。年、月、作品名、出版社あるいは発表誌紙（巻号省略）の順に記し、週刊誌、新聞は最後に日付を記した。
1. 特別な場合（書名、人名、慣用）を除いては、旧字体は新字体に改め、書名、タイトルは、旧仮名遣いは原文のままとした。

1903（明治36）年 9月○随筆「山林」『有斐』

1911（明44） 2月○小説「酒」『早稲田文学』 12月○小説「照江」全

1912（明45・大1） 1月○小説「蔓」『ホトトギス』 2月○小説「赤い月」『スバル』 5月○小説「誘惑」全 6月○小説「寂しき女」全 ○小説「なまけもの」『早稲田文学』 8月○小説「いてふ」『スバル』 9月○小説「ゆきずり」全 10月○短編集『誘惑』（誘惑・酒・照江・赤い月・火影・いてふ・ゆきずり）下町社（末見）

1913（大2） 1月○小説「処女作」『スバル』 2月○小説「幼い子」全 3月○小説「瀧」全 5月「後ろ姿でも一目見たい人（アンケート）」『新潮』 6月○小説「乞食の夫婦」『スバル』 9月○小説「破られた百合」全 ○小説「贈物」『秀才文壇』 10月○小説「裁縫」『新小説』 ○小説「餌食」『早稲田講演』 11月○小説「影」『早稲田文学』

1914（大3） 1月「文壇月評（12月）」『文章世界』 3月○創作集『蛇つかひ』（蛇つかひ・乞食の夫婦・餌食・蔓・幼い子）（現代文芸叢書35）春陽堂 4月○小説「幸福と影」『文章世界』 ○小説「祈り」『新潮』

1915（大4） 1月○小説「二少女」全 4月○評論「武者小路実篤論」全 7月○小説「破裂」全 10月○翻訳『地獄』（ストリンドベルヒ作）新潮社 11月○感想「微かな声」・翻訳「五つの歳で

『閻』の上に」（ストリンドベルヒ作）・「六号雑誌」『ラ・テール』創刊号 12月○小説「慶助老爺」・小説「餌食」・感想「或る人が言った」・「六号雑誌」全

1916（大5） 1月「大正5年文壇の予想（アンケート）」『新潮』 ○小説「生れる子のために」・感想「日記から」・「六号雑誌」『ラ・テール』○翻訳『赤い部屋』（ストリンドベルヒ作 阿部次郎と共訳）新潮社 2月○小説「山寺」『ラ・テール』特別号 ○小説「澄子の兄」・「新春文壇の印象（アンケート）」『新潮』 4月○小説「小さい一人」『ラ・テール』 5月○翻訳「春」（トルストイ作）・小説「三宝鳥」『文章倶楽部』創刊号 6月○随筆「先に行つた人」『新潮』 ○小説「薔薇色の頬（長篇小説『受難者』の一説）」『文章倶楽部』 7月○感想「如何にタゴールを観る乎」『新潮』 8月○随筆「創作の傍より」『文章倶楽部』 ○「微妙な魂の発展を取扱った長いもの」（どんな作品を書かうと思つて居る乎（アンケート）『新潮』 9月「ミレエの絵（余が好める秋の描写）（アンケート）」『文章倶楽部』○随筆「時代について」『新潮』 ○長編小説『受難者』新潮社 ○「余は如何にしてトルストイを知り又は之に傾倒するに至りたる乎（アンケート）」『トルストイ研究』創刊号 10月○小説「脱却」・「余を最も強く感動せしめたる書に就きての記憶と印象（アンケート）」『新潮』 ○翻訳「三つの質問」（トルストイ作）『トルストイ研究』○随筆「時代の理解と時代の超越（私が読んだ物の中から）」『層雲』 11月○随筆「恐ろしい言葉！（人道主義に対する批判）」『新潮』○翻訳『幼年・少年』（トルストイ作）（トルストイ叢書3）新潮社

1917（大6） 1月○小説「縮図」『文章倶楽部』○随筆「白鳥氏について」『文章世界』 3月○創作集『寂しき道』（山寺・二少女・飛驒街道・長崎にて・小さい一人・破裂・寂しき道）新潮社 ○小説「飛驒街道」『文章世界』 4月「題のつけ方

一部分と全体と（アンケート）」『文章倶楽部』
5月○小説「S夫人へ」『文章倶楽部』○小説
「他人の恋」『新潮』○翻訳『青年』（トルスト
イ作）（トルストイ叢書7）新潮社 6月○随筆
「寂しい感じの人（武者小路実篤氏の印象）」『新
潮』○随筆「私の文壇に出るまで（文壇諸家立志
伝）『受難者』を書くまで」『文章倶楽部』 7月
○随筆「横山大観に会つて—中学四年生・自然主
義勃興時代—」全 8月○随筆「七月の日記」『新
潮』10月○長編小説『暗礁』新潮社 11月○随筆
「不滅に生きようとする意志（余は如何なる要求
に依り、如何なる態度に於いて創作をなす乎）」
『新潮』○随筆「七月」『日記一年』新潮社
12月○感想「二つの短篇に就て—本年発表せる創
作に就ての感想」『新潮』○評伝『人及び芸術
家としての国木田独歩』（日本文豪評伝叢書I）
新潮社

1918（大7） 1月○小説「少女を殺すには」『文章
倶楽部』○小説「或る自殺」『文章世界』○小
説「海のほとり」『新潮』 2月○随筆「貧しさ
の中から勇気を持って（芸術と芸術家の生活）」
全 3月○小説「新らしき朝」全 ○随筆「ドフ
トエフスキーのエピロオグ」『トルストイ研究』
○随筆「葬式から帰つて」『大学及大学生』
○小説「悔改めた女」『太陽』 5月○小説「友
の遺稿」・「私が最も好む土地と花と人々（アン
ケート）」『文章倶楽部』○随筆「唯真正な芸術
を産む事のみ（芸術とイズムとの関係に就ての考
察）」『新潮』○短編集『愛と憎み』（省三と小
夜子・餌食・少女を殺すには・三宝烏・角燈・蛇
つかひ・海のほとり）（新進作家叢書13）新潮社
8月○小説「守銭奴」『中外』○小説「死の予
感—榎本の日記—」『雄弁』 9月○戯曲「敗北
者」『太陽』○随筆「代々木から」『文章世界』
○随筆「ドストエフスキーの洞察力」『トルスト
イ研究』 10月○随筆「或人との対話」『新潮』
11月○随筆「精神に於ても果して平民内閣か（文
士の見たる新内閣）」『大観』 12月○随筆「見え

る事よりもある事（本年発表せる創作に就て）」
『新潮』

1919（大8） 1月○小説「或る作家の手紙」『大観』
○小説「留守居」・随筆「想の纏め方（私の創作
の実際）」『文章倶楽部』○小説「谷間の宿」
『文章世界』○小説「道づれ」・随筆「生涯忘
れる事の出来ない苦しい生活の中で書いた『受難
者』（出世作を出すまで）」・随筆「公開状に対す
る私の返事」『新潮』○随筆「ツルゲーネフの
思ひ出」『トルストイ研究』○長編小説『不滅
の像1 あこがれ』新潮社 3月○随筆「早春の
日記」『大観』 6月○長編小説『不滅の像2
彷徨』新潮社○「余の文章の初めて活字となり
たる時（アンケート）」『文章倶楽部』 8月○随
筆「啄木の小説」『新潮』 12月「『不滅の像』二
巻だけ（予が本年発表せる創作に就いて）（アン
ケート）」全

1920（大9） 1月○小説「夜霧」『新潮』 2月○随
筆「私の愛読した日本の作家」『文章倶楽部』
5月○小説「或る少年」全 ○長編小説『不滅の
像3 新しき旅』新潮社 7月○小説「握手」
『文章世界』 9月○翻訳『赤い部屋』ストリン
ドベルヒ作（阿部次郎と共訳）（縮刷訂正版）新
潮社 10月○随筆「啄木の故郷」『新潮』○創作
集『檜の葉』（ベートーフェン・弱き心・或る作
家の手紙・酒・守銭奴・或る自殺・或る少年・他
人の恋・留守居・道づれ・谷間の宿）新潮社
○随筆「飛騨の学術的価値」『濃飛往来』 11月
○小説「新井博士の話」『文章倶楽部』 12月「云
ふべき事無し（予が本年発表せる創作に就て）（ア
ンケート）」『新潮』

1921（大10） 1月「私の好きな小説戯曲中の女（ア
ンケート）」『文章倶楽部』○小説「世界人」
・随筆「或る若き女へ」『新文学』○随筆「風
俗史上より見たる京都」『解放』 3月○小説『運
命の影（別題「山寺」）』新潮社 5月「シャ
ール・ペキーのもの（読んだ物見た物）（アンケ
ート）」『新潮』 6月○詩「二つの魂」全 ○随筆

- 「長篇小説の六つかしい点」『文章倶楽部』 7月○小説「二人の乞食」全 ○小説「Nagasaki」『ローマ字書き短篇集』—土岐善麿綴る—新潮社 ○翻訳『赤い部屋』ストリンドベルヒ作（阿部次郎と共訳）（世界文芸全集第四編）新潮社 10月「女・酒・花」（諸家）（アンケート）『文章倶楽部』 11月○随筆「長篇小説に就いての考察（長篇小説に対する抱負と考察）」『新潮』 12月「何も云ひたくない（本年発表せる創作に就て）（アンケート）」全 ○創作集『三つの木』（お千代・寂しき道・世界人）新潮社
- 1922（大11） 2月○随筆「悲しむべき傾向」『文章倶楽部』 ○小説「街道—『不滅の像』の一節—」有島武郎・志賀直哉編集『現代三十三人集』新潮社 3月「創作座談（執筆の実際）」『文章倶楽部』 4月○小説「歓迎」『新潮』 5月○長編戯曲『訪る、女』新潮社 ○随筆「記念のために—無名作家の死—」『太陽』 7月○随筆「朽ちゆく彫刻」『文章倶楽部』 8月○随筆「死んだもの、夢」『常春』 10月○随筆「矢崎美盛君」『改造』 12月○感想集『心の窓』（握手・代々木から・啄木の故郷など27編）新潮社
- 1923（大12） 1月○小説「女弟子」・「子供に読ませたい書物（アンケート）」『婦人公論』 5月○小説「受難者」（梗概批評）『現代名著集』一誠社 9月「人生に於ける恋愛の位置（アンケート）」『婦人公論』 10月○随筆「未曾有の大震災に遭遇して」全 12月○戯曲「人柱」全11・12合併号
- 1924（大13） 1月○長編小説『極光 上巻』新潮社 ○「真面目にならされた事（災禍の中から生れ出した幸福）（アンケート）」『婦人公論』 2月○随筆「最近街で見た若い女たち（或る女の印象と批判）全 5月○長編小説『極光 下巻』新潮社 6月○小説「彼の心がかり」『文章倶楽部』 ○「予が囑望する新作家及び注目した作品（アンケート）」『新潮』 11月「わが愛読の秋に関する古今東西の文章詩歌に就いて（下）（アンケート）」『随筆』 12月○小説「羊の怒る時」『台湾日々新報』夕刊14日～翌14年3月30日まで104回連載
- 1925（大14） 1月○小説「夏樹」『婦人公論』（12月まで連載） 6月○評論「芸術の普遍化の問題」『新潮』 7月○随筆「仕事部屋から」『文芸戦線』 ○随筆「仕事部屋から」『進め』 ○書評「心をひく作品—土岐善麿『朝の散歩』—」『日光』 ○随筆「異国の空に自殺せるわが女流音楽家久野ひさ子女史の碑」『婦人公論』 8月○随筆「仕事部屋から」『進め』 9月○随筆「ミレーの芸術」『文芸戦線』 10月○小説『羊の怒る時』聚芳閣 11月○戯曲「霧笛」『解放』
- 1926（大15・昭1） 1月○随筆「大正十五年の文壇及び劇壇に就て語る」『新潮』 ○小説「夏樹」新潮社 ○随筆「故郷」『一日一文』朝日新聞社 3月○随筆「階級文化と人類文化」『文芸戦線』 6月○随筆「その頃のこと（古き写真に就いての思ひ出）創作的精力」『文章倶楽部』 ○随筆「わが故郷の自然美—飛騨の国」『太陽』増刊 ○書評「『解放の芸術』—青野季吉著—を読んで」『文芸戦線』 ○随筆「いはゆる文豪楽聖」『文芸市場』 ○「好きな政治家は誰か（アンケート）」『随筆』創刊号 7月○随筆「避暑地について」『不同調』 ○「『解放の芸術』の価値（アンケート）」『解放』 9月○感想「涙と笑ひ」『令女界』 ○「私の此頃の生活（アンケート）」『文章倶楽部』 10月○随筆「旅を前にして」『文章倶楽部』 ○長編小説『追放』新潮社
- 1927（昭2） 1月○小説「名誉婆さん」『地方』 4月○随筆「兎の棲家」『文芸時代』 5月○随筆「旅の話」『文章倶楽部』 ○随筆「バートホーフェン」『全人』 ○小説「電気こんろ」『サンデー毎日』（29日） 6月○随筆「バルザックの家」『文章倶楽部』 7月○随筆「フランスの二方面」『令女界』 ○「旅の思ひで—今度欧羅巴を—」（アンケート）『文芸公論』 8月○紀行「啄木の故郷」『読方綴方鑑賞文選 高等科』 ○随筆「時代錯誤の抑圧—検閲制度を難ず—」

『東京日日新聞』(12日) 9月「文壇生活苦しかった事・嬉しかった事」[「現文壇に対する不満」(アンケートの答二つ)『随筆』○翻訳「ブルジョア(彫像)」[「軍人(彫像)」(エルハアレン作)『プロレタリア芸術』○随筆「彼の役割」『文芸時報』 10月○戯曲「その日」『プロレタリア芸術』○「時代意識に目覚めた女性(私の最も好きな作中の女性)」[「私の好きな人物等」(アンケートの答二つ)『文章倶楽部』○随筆「ベートホーフェン」[「ベートーヴェン研究」(全人・特集 ベートーヴェン百年祭記念出版)イデア書院 11月○小説「若き印度人」[『令女界』○随筆「プロレタリア音楽への要望」[『プロレタリア芸術』 12月○「プロレタリア芸術運動の中で(私が本年発表した創作に就いて)(アンケート)』[『新潮』

1928(昭3) 1月○小説「悩みをとほして」[『令女界』昭和4年3月まで15回連載 ○小説「奇蹟」[『プロレタリア芸術』○「本年の計画希望について(アンケート)」[『文章倶楽部』○「プロレタリア芸術こそ(文学と生活及びその将来)」(アンケート)『文芸公論』○「取消しを求む」[『文芸時報』(週刊 1日) 3月○随筆「旅の話」[『世界文学月報』(15日) ○小説「救はれないマドレーヌ」[『文芸公論』 5月○小説「黒人の兄弟」[『戦旗』創刊号 7月○随筆「京都から」全 8月○小説「甲板船客」全 12月「少ない製作(私が本年発表した創作に就いて)」(アンケート)『新潮』○小説「焦熱地獄」[『無産者新聞』(26日～翌年1月7・11・15・20日)

1929(昭4) 1月○小説「船大工」[『戦旗』 4月○随筆「同志山本の遺骸を前にして」全 ○随筆「初めて踏んだ異国の土」[『文章倶楽部』 5月○随筆「僕の家」[『若草』○随筆「国際的精神の高揚」[『思想』 9月○戯曲「阿片戦争」[『戦旗』○随筆「『阿片戦争』に就いて」[『築地小劇場』 10月○随筆「トーキー礼讃」[『新興映画』

1930(昭5) 1月○創作集『阿片戦争』(甲板船客・

黒人の兄弟・船大工・名誉婆さん・不思議・その日・阿片戦争)(日本プロレタリア作家叢書6) 戦旗社 2月○小説『受難者・山寺』(現代長篇小説集24) 新潮社 ○評論「『瓦斯マスク』に就いて」[『築地小劇場』7-1 ○評論「『瓦斯マスク』について」(再録)・随筆「最近の築地小劇場」[『築地小劇場』7-2 (関西巡業号) 3月○戯曲「隠れ家」[『戦旗』 4月○戯曲「平和記念日」[『舞台戯曲』○小説「異国の同志」[『若草』 5月○戯曲「秩序を保つものは誰か?」[『批判』創刊号(『我等』改題) 7月○随筆「断想三つ」[『プロレタリア文学』 12月○戯曲「南阿戦争」[『中央公論』○小説『血の九月』鉄塔書院(未見)

1931(昭6) 1月○戯曲「十七人の兵士」[『戦旗』(特集号)○随筆「抗議—戯曲『南阿戦争』について」[『ナッパ』○戯曲「秩序を保つものは誰か」[『戦旗三十六人集』改造社 2月○小説「きよ子の経験」[『ナッパ』 5月○小説「文盲征伐」[『若草』 7月○戯曲「平和記念日」[『日本戯曲集7』新潮社 10月○書評「茂森唯士著『ソゼート芸術の全望』をよむ」[『読売新聞』(9日)

1932(昭7) 3月○随筆「きよ子の経験」年刊『日本プロレタリア創作集』改訂版 日本プロレタリア作家同盟出版部 ○随筆「飛驒の高山」[『濃飛文学読本』創生社

1933(昭8) 1月○随筆「梅村高山県知事について」[『飛驒史壇』 5月○論文「大八賀村上野垣内における石器時代の巨石構築」・「後記」(無署名)『会報』創刊号 6月○小説「掘出された石棒」[『若草』 7月○小説「本郷村善九郎」[『中央公論』 8月○小説「テンボの孫助」[『人物評論』 9月○論文「飛驒の土偶」[『会報』

1934(昭9) 1月○論文「石冠の用途について」・論文「飛驒に於ける骨角器及び骨片の出土について(赤木清)」[『会報』 5月○論文「石冠の第三型式」(赤木清)・随筆「東京だより」(赤木清)『石冠』(『会報』改題) 6月○小説「独身

の権利』『若草』 ○論文「白川村大家族部落と石器時代の遺跡」『ドルメン』 8月○論文「飛驒に於ける古式縄文土器」(赤木清)・随筆「無数河村長次郎とその妻・その家」(赤木清)『石冠』 9月○随筆「彼等の役割」『文芸時報』(週刊) 10月○随筆「飛驒の学術的価値」『濃飛往来』 ○論文「再び環状石垣その他について」・論文「靱痕ある弥生式土器」(佐藤義男)『石冠』 ○翻訳『幼年・少年』(トルストイ作)新潮文庫

1935(昭10) 1月○小説「飛驒の維新『雪崩する国』第一編」(連載①～⑩)・論文「環状石垣の発掘」『ひだびと』創刊号(『石冠』改題) ○小説「鍊獄を行く」(連載①～⑥)『若草』 2月○随筆「飛驒の歴史の見方」・論文「徳川時代の飛驒の人口」(赤木清)『ひだびと』 3月○論文「江名子糠塚の土器1」(赤木清)『ひだびと』 4月○論文「江名子糠塚の土器2」(赤木清)・コラム「縄紋ある弥生式土器」(赤木)・書評「八幡一郎氏の近業『北佐久郡の考古学的調査』」『ひだびと』 6月○論文「早乙女考」・論文「江名子糠塚の土器3」(赤木清)『ひだびと』 7月○評伝『飛驒における山岡鉄舟』高山観光協会 ○論文「古式縄紋土器の新資料」(赤木清)・「『飛驒における山岡鉄舟』の補遺」(編集部後記)『ひだびと』 9月○論文「飛驒一之宮附近出土の石器時代土器について」(赤木清)『ひだびと』 11月○小説「額ける処女」『令女界』 ○巻頭言「飛驒に咲く花」『ひだびと』 12月○随筆「岳の見える窓からー『雪崩する国』について」・論文「方形底の縄文土器」(赤木清)・「安永日記ー都竹古文書 その一」のはしがき『ひだびと』

1936(昭11) 1月○小説ー「梅村速水ー『雪崩する国』第二編」(連載①～⑩)・論文「飛驒の薄手式縄文土器1」(赤木清)『ひだびと』 2月○論文「飛驒の薄手式縄文土器2」(赤木清)『ひだびと』 ○随筆「考古学と詩」『ミネルヴァ』創刊

号 3月○論文「宮村ぬけ洞の土器」(赤木清)・随筆「森本文爾氏の死を悼む」『ひだびと』 4月○「三周年記念号巻頭言」・コラム「赤木清氏の憤慨」・論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟1」(赤木清)『ひだびと』 5月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟2」(赤木清)全 6月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟3」(赤木清)『ひだびと』 ○随筆「鰐の口」『山脈詩派』 7月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟4」(赤木清)・論文「飛驒の貝殻紋のある土器」(赤木清)『ひだびと』 8月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟5」(赤木清)『ひだびと』 9月○随筆「子供組について(年令による組)」(多志弥一)『ひだびと』 10月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟6」(赤木清)『ひだびと』 ○論文「飛驒の繊維土器」(赤木清)『考古学論叢』第三集 11月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟7」・論文「古城郡国府村上広瀬下道の遺蹟」(共に赤木清)『ひだびと』 12月○論文「白川村の大家族制度をめぐる諸問題」(赤木清)『ひだびと』 ○報告消息「飛驒ひじ山の最近の発掘」(赤木清)『中部考古学会彙報』

1937(昭12) 1月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟8」(赤木清)・論文「白川村の大家族制度をめぐる諸問題補遺」(赤木清)・随筆「多頭石斧についてー通信と断片」(赤木生)・随筆「飛驒大工の特徴の一つー通信と断片ー」(多志弥一)・随筆「農家はどうして建てられたか(1調査要項について)」(多志弥一)・コラム「飛驒にはバットもないそうナ」(A生)『ひだびと』 2月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟9」(赤木清)『ひだびと』 3月○論文「江名子ひじ山の石器時代遺蹟10」(赤木清)『ひだびと』 4月○随筆「ニームの思ひ出」『ひだびと』 ○随筆「文学と民俗」『野火』 ○論文「古式石器の新資料」(赤木清)『中部考古学会彙報』 ○随筆「古文書あさり」『書物展望』 5月○論文「西ノ山弥生式遺蹟」(赤木清)・随筆「白川村民の

- 人類学的研究」(多志弥一)『ひだびと』 ○随筆「『受難者』を書いたころ」『長篇小説』(『飛騨作家』28号に転載・初出未見) 6月○論文「大野郡上枝村新宮の弥生式遺蹟」(赤木清)・コラム「取消し(前号)「白川村居住民の人類学的研究について」(多志)『ひだびと』 7月○コラム「風吹小屋」(赤木生)『ひだびと』 8月○論文「白川村木谷の石器時代遺跡」(赤木清)・小説「老ひた猟師」『ひだびと』 9月○論文「考古学的遺物と用途の問題」・論文「押型紋に於ける磨清手法について」(共に赤木清)・「編集部だより」(江馬生)『ひだびと』 10月○論文「石冠と枕石」(赤木清)・随筆「黄いろい皮膚」・随筆「銃後の農村(ヨナイ制度)」(多志弥一)・コラム「生藩の焼畑」(赤木清)『ひだびと』 11月○コラム「チョーダの問題」(多志生)『ひだびと』 12月○論文「考古学の新動向」(赤木清)・コラム「桶屋米」(多志生)『ひだびと』
- 1938(昭13) 1月○随筆「芸術の未来性」『ひだびと』 2月○論文「松原の石器時代遺蹟予報」(赤木清)・論文「白川村中切地方は血族結婚なりや」(多志弥一)『ひだびと』 3月○戯曲「神かくし」・コラム「長篇『雪崩する国』について」『ひだびと』 4月○論文「大八賀村山口の森下遺蹟1」(赤木清)『ひだびと』 5月○随筆「文学と民俗」『ひだびと』 6月○長編小説『山の民 第一部 雪崩する国』飛騨考古土俗学会 7月○論文「大八賀村山口の森下遺蹟2」・随筆「名前で苦労する話」・コラム「父の話」(江馬生)・随筆「飛騨の元禄検地条目ー通信と断片ー」(多志弥一)『ひだびと』 9月○随筆「故浜田博士を偲ぶ」・コラム「『山の民』の季節」(作者)『ひだびと』 10月○コラム「飛騨の鷹」(多志弥一)『ひだびと』 12月○論文「飛騨土偶の新資料」(赤木清)『ひだびと』 ○長編小説『受難者』新潮文庫
- 1939(昭14) 2月○長編小説『山の民 第二部 奔流』・飛騨考古土俗学会 3月○随筆「或る作家の手記」・コラム「女優志願者たちへ」・「編集後記」(江馬)『ひだびと』 ○映画小説「飛騨の鷹」『映画朝日』 4月○論文「糠塚式文化の研究1」(赤木清)『ひだびと』 5月○「『岳麓の村を歩く』のまえがき」『ひだびと』 7月○コラム「飛騨の工匠と娘」(多志生)『ひだびと』 8月○随筆「故浜田博士と飛騨」『ひだびと』 9月○随筆「創作と方言」・随筆「平家住みと二階ずみ」(多志生)全 10月「編集部だより」(江馬生)・推薦文『人生の春』(大館則貞著・エルム書房)広告『ひだびと』
- 1940(昭15) 2月○長編小説『山の民 第三部 途上』飛騨考古土俗学会 6月○随筆「鹿を現わす馬の話」(赤木清)『ひだびと』 8月○随筆「岳の見える窓から」『ひだびと』 9月○随筆「外来文化と日本文化」(『昭徳』より転載)『ひだびと』 11月○随筆「地方の美味」『月明』
- 1941(昭16) 1月○小説「航海」『ひだびと』 2月○随筆「飛騨山夜話」(多志弥一)『ひだびと』 4月○報告「文化連盟結成」(無署名)『ひだびと』 ○随筆「飛騨の農民芸術」『旅』 6月○随筆「一位の木」『月明』 ○随筆「高山の今昔」『旅』 ○随筆「文学と国民性」『日本学芸新聞』(10日) 7月○シナリオ「飛騨の鷹」『ひだびと』 ○随筆「飛騨文化の現状」『日本学芸新聞』(25日) ○随筆「外来文化と日本文化」『日本文化の性格』(『昭徳』編集部編)文録社 10月○評論「飛騨の鳥毛打と金蔵獅子」『文芸春秋』 ○随筆「文化の問題によせて」・論文「六頭石斧の新資料」(多志生)『ひだびと』 ○随筆「地方図書館と巡回文庫」『東京堂月報』 11月○随筆「郷土研究と地方文化運動」『ひだびと』 12月○評論「文化と文化運動の意味」『ひだびと』 ○随筆「ひだのたくみの末裔」『新潮』 ○小説『若き日の山岡鉄舟』田中宋栄堂
- 1942(昭17) 1月○随筆「ペナンの思ひ出」『月明』 ○コラム「戦時と文化運動」(江馬生)・「飛騨文化連盟報告」(無署名)『ひだびと』 ○随筆

- 「自ら知らない善さ・美しさ」『書物展望』 3月。戯曲「長兵衛おやぢ」・「飛驒移動劇場第一回公演」(編集部)『ひだびと』 ○随筆「南方文化工作の重点」『日本読書新聞』(23日) 4月。書評「柳田国男氏の『菅江真澄』をよんで」『創元』 ○随筆「減私奉公する地方人」『旅』 ○推薦文「杉本壽著『支那林業経済建設論』広告」『ひだびと』 5月。随筆「娯楽の再吟味」『ひだびと』 7月。随筆「郷土演劇研究所の設置について」・論文「石冠の新資料」(赤木清)『ひだびと』 8月。戯曲「仮の帰還」『ひだびと』 9月。戯曲「仮の帰還2」『ひだびと』 ○随筆「山国飛驒の文化活動を語る」『保健教育』 ○随筆「どんな本が出してほしいか」『日本読書新聞』(14日) 11月。随筆「芸術の勝利」『ひだびと』 ○12月。随筆「最初の嵐ー作家の発途の回想ー」『ひだびと』 月不明。郷土史劇『嘉念坊物語』謄写版印刷
- 1943 (昭18) 3月。「神田孝平氏一行の飛驒旅行(青山入夢日記より)はしがき」(江馬生)『ひだびと』 4月。随筆「高山芸術座の第三回郷土演劇公演会」『ひだびと』 7月。随筆「高山芸術座のこと」・コラム「飛驒文化連盟の図書供出運動」(飛驒文化連盟)『ひだびと』 10月。戯曲「つぐなひ」『ひだびと』
- 1944 (昭19) 1月。随筆「飛驒百姓と肉食」(多志弥一)『ひだびと』 2月。評論戯曲集『郷土演劇運動の理論と実際』(長兵衛おやぢ・仮の帰還・つぐなひ・嘉右衛門父子・案山子)白林書房 4月。戯曲「雪崩の夜」『青年』 12月。随筆「抵抗摩擦に負けるなー地方に於ける文化運動の場合」『文学報国』紙(1日)
- 1946 (昭21) 6月。評論「地方演劇文化ー真の民衆劇を日ざしてー」『劇場』 8月。随筆「駕籠訴の墓」『教育と社会』
- 1947 (昭22) 5月。長編小説『山の民 第一部雪崩する国』隆文堂 9月。小説『血の九月』在日朝鮮民主青年同盟岐阜県飛驒支部
- 1948 (昭23) 3月。評論「農民の革命的精神の伝統一ひだを例としてー」『歴史評論』 11月。長編小説『山の民 第一部』(異装本)隆文堂
- 1949 (昭24) 1月。随筆「友へ」『岐阜文学』第一集 3月。小説「本郷村善九郎」(改作)『アカハタ』(連載 18日~5月18日) ○戯曲「やまんば」春(推定)『あらがね』(神岡鉱山労働組合) 4月。小説「本郷村善九郎」(『中央公論』に発表のもの)『現代文学代表作全集7』万里閣 9月。随筆「神岡鉱山と父弥平」『志らまゆ美』5号 10月。随筆「とりわけ地方の芸術家のために」『新日本文学』 12月。長編小説『山の民』第一部・第二部(改作)冬芽書房 ○小説「本郷村善九郎」(一)『しらまゆみ』6号
- 1950 (昭25) 1月。長編小説『山の民』第三部(改作)冬芽書房 3月。小説『本郷村善九郎』冬芽書房 ○評論「ひだの大原騒動」『歴史評論』 6月。小説「本郷村善九郎」(二)『しらまゆみ』7号 11月。小説「長次郎の妻」・「編集後記」(江馬生)『人民文学』創刊号 12月。評論「芸術より政治が優位ということ」・「編集後記」(江馬生)『人民文学』
- 1951 (昭26) 1月「編集後記」(江馬生)『人民文学』 2月。評論「文学の大衆路線へ」・「編集後記」(なかし)『人民文学』 ○長編小説『受難者』角川文庫 ○連載小説「流人」第一回『新女性』 ○「藤森成吉著『若き日の悩み』の解説」角川文庫 3月。「新篇『綴方教室』(豊田正子著・ハト書房刊)のあとがき」『人民文学』3月号広告 4月。戯曲「本郷村善九郎」・評論「文学運動における組織の問題」(星野まもる)『人民文学』 5月「編集後記」(なかし)『人民文学』 6月「編集後記」(なかし)『人民文学』 7月。評論「もりあがる人民文学運動」・「編集後記」(なかし)『人民文学』 8月。随筆「ピカソのこと」『人民文学』 9月。長編小説『山の民』角川文庫(冬芽書房版)
- 1952 (昭27) 12月。連載小説「流人」①~③『人民

- 文学』翌年2月まで
- 1953(昭28) 5月○座談会「歴史と文学」(服部之
総・松島栄一・武田泰淳・江馬など8人) 6月
○小説『流人(付長次郎の妻)』青木文庫 7月
「小説合評」(江馬修・滝崎安之助)『人民文学』
9月○小説「血の九月」『人民文学』 10月○評
論「新しい歴史小説のために」『日本文学』
- 1954(昭29) 3月○随筆「『山の民』の運命」 新
協劇団第62回公演パンフレット 月不明○「『山
の民』を見る人々へー原作にふれつゝー」新協劇
団20周年記念公演 大阪・京都公演パンフレッ
ト 5月○脚本『山の民』江馬修原作・村山知義
脚色『新劇』 10月○小説「黒人の兄弟」『日本
プロレタリア文学大系3』三一書房
- 1955(昭30) 2月○農村喜劇「鬼じじ鬼ばば」『文
学の友』 7月○長編小説『氷の河 第一部』理
論社 8月○『全 第二部』全
- 1956(昭31) 4月○小説『本郷村善九郎』(全面改
作)理論社(新書版) ○随筆「下呂ー明治の末
のものがたり『百人百湯』『旅行の手帖』
- 1957(昭32) 6月○自伝『一作家の歩み』理論社
- 1958(昭33) 5月○長編小説『定稿 山の民 第一
部 ひだの国』理論社 6月『全 第二部 梅村
速水』全 8月『全 第三部 ホヤを食う人び
と』全 9月『全 第四部 蜂起』全
- 1962(昭37) 1月○随筆「蘇州の古代文化遺物をみ
て」『文化評論』 5月○随筆「紅花崗」『文化評
論』
- 1963(昭38) 1月○随筆「わたしの経験」(「現実の
たたかいをえがくということ」6)『アカハタ』
(8日) 10月○随筆「黒島伝治の人と文学」
『アカハタ』(17日) 11月○小説「延安讃歌」
『文化評論』(臨時増刊小説特集号)
- 1964(昭39) 11月○創作集『延安賛歌』(延安賛
歌・紅花崗・長次郎の妻・徳右衛門の家・ゆらぐ
大地・血の九月)新日本出版社 12月○小説「本
郷村善九郎」『日本プロレタリア小説集3』新日
本出版社(理論社版)
- 1965(昭40) 9月○随筆「犬とボクを一緒にする
な」『30秒で一回笑わす本』青春社
- 1966(昭41) 5月○評論「文学大衆化の問題によっ
て」『民主文学』
- 1967(昭42) 10月○「新中国紀行『不滅の延安』豊
田正子著 あとがき」五同産業出版部 11月○小
説「飛驒街道」『現代日本文学全集85』筑摩書房
- 1968(昭43) 1月○随筆「明治末年の下呂」温泉新
書『下呂』日本温泉協会編 8月○「山の民 第
四部 蜂起」『全集 現代文学の発見12』学芸書
林(理論社版) 12月○書評「松村一人著『毛沢
東と現代修正主義』」『東風新聞』(2日)
- 1970(昭45) 6月○随筆「初めて独歩を知った頃」
『日本近代文学大系10 国木田独歩集』月報 角
川書店 9月○随筆「下呂の思い出」『温泉』
- 1971(昭46) 9月○随筆「飛驒の秋祭」『日本と世
界の旅』(山と溪谷社) 12月「『山の民』を大改
作」『朝日新聞』(27日)
- 1972(昭47) 4月○随筆「高山の春まつり」『ポス
ト』(郵政省) 7月○評論「文芸講話にみちび
かれて」『AA作家日本委員会シリーズ2』
- 1973(昭48) 3月『江馬修作品集ⅠⅡ 山の民上
下』北溟社(理論社版補訂) 6月○随筆「森田
草平氏との出会い」『岐阜日日新聞』(16日)○『江
馬修作品集Ⅲ 飛驒百姓騒動記』(本郷村善九郎・
流人・長次郎の妻・徳右衛門の家)北溟社 10月
『江馬修作品集Ⅳ 受難者・他』北溟社
- 1974(昭49) 3月○随筆「ゲルニカの勝利を讃う」
・随筆「玉川上水の茶番劇」『ひろい世の中』Ⅰ
6月○評論「文学における物語のすばらしい意義
と影響力について」全2 9月○小説「トントコ
坊やの歌」(天児直美と共著)全3
- 1975(昭50) (1月23日 江馬修没)
2月○推薦文「『明治・東海政治史』の帯」朝日
新聞名古屋社会部 六法出版社 3月○随筆「羽
仁五郎と江馬との小対話」『ひろい世の中』4・
追悼号
- 1976(昭51) 1月○「遺稿」全5 4月○小説「本

郷村善九郎『土とふるさとの文学全集9』家の
光協会（理論社版） 7月○「山の民第四部 蜂
起」『全集現代文学の発見12』愛蔵版 学芸書林

- 1977（昭52） 1月○小説「油汗を流して三昼夜」
（天児直美と共著）『ひろい世の中』6終刊号
1978（昭53） 6月○長編小説『山の民』全3冊 濃
飛文庫（角川文庫版）
1981（昭56） ○随筆「トーキー礼讃」『日本社会主
義文化運動資料10』収録（戦旗復刻版刊行会）
1983（昭58） 10月○評伝『人及び芸術家としての国
木田独歩』近代作家研究叢書12 日本図書セン
ター（新潮社版） 12月○随筆「白鳥氏につい
て」『正宗白鳥全集』5 月報（『文章世界』大正
6年1月の転載）福武書店
1984（昭59） 10月「奇蹟・黒人の兄弟・甲板船客・
きよ子の経験・本郷村善九郎（万里閣版）」『日本
プロレタリア文学集16』新日本出版社
1985（昭60） 11月○長編小説『山の民』上下 春秋
社（冬芽書房版補訂）『全 特装本』（著者署名入
限定百部）
1986（昭61） 3月○随筆「下呂の思い出」（再録）
『飛驒下呂』下呂町刊
1989（昭64・平1） 1月○小説『飛驒百姓騒動記』
（本郷村善九郎・長次郎の妻・流入）春秋社（北
溟社版補訂） ○小説「若き日の山岡鉄舟」『高
山市民時報』連載（12日～平成3年4月4日まで
106回）（田中宋栄堂版） 6月○小説「血の九
月」上『民濤』（在日文芸・季刊）（在日朝鮮民主
青年同盟岐阜県飛驒支部版） 9月「全」下 全
10月○小説『羊の怒る時』影書房（聚芳閣版）
○自伝『一作家の歩み』近代作家研究叢書65 日
本図書センター（理論社版）
1995（平7） 7月○「山の民・抄」『岐阜県文学全
集』4 郷土出版社（飛驒考古土俗学会版）
1997（平9） 6月○長編小説『山の民』上・下 新
装版 春秋社

江馬修参考文献目録

例 言

1. 本参考文献目録は、江馬修ならびに、江馬修作品
に関して書かれたものを、発表年代順に記した。
 1. 本文献は、単行本、新聞、雑誌などに発表され
た、書評、江馬修論、作品論、身辺雑記、座談会な
どで、本来参考文献とはいいいがたいゴシップ記事、
まともに扱っているとはいいいがたい江馬修論、作品
論も加えた。当時江馬がどのように扱われ、評価さ
れていたかを知る上でも、貴重な資料と考えたため
である。
 1. 紙幅の関係上、手元にあるすべてを記載するこ
とはできなかった。特に新聞記事は、署名入りのも
の、あるいは必要と考えられるもののみにとどめ
た。
 1. 紙幅の関係上、一年ごとの改行とした。年、月、
著者名、作品名、出版社あるいは掲載誌紙（巻号省
略）の順に記し、週刊誌、新聞は最後に日付を記し
た。著者名のないものは無署名のものである。
 1. 旧字体は新字体に改め、書名、タイトルは、旧仮
名遣いは原文のままとした。
 1. *印は編者の注記で、江馬修作品の何について述
べてあるかなどを記した。
- 1911（明治44）年 3月○安倍能成「二月の小説」-*
「酒」-『ホトトギス』○「二月の文壇概観」-*
「酒」-『早稲田文学』○小宮豊隆「最近の文
壇（二月の小説評）」-*「酒」-『新小説』
- 1912（明45・大1） 1月○岩野泡鳴「若い人々の文
章」-*「照江」-『文章世界』 2月「文士録」
『文章世界』増刊号に名前が掲載される 12月
○平出修「事務室より」-*短編集『誘惑』-
『スバル』（昭56・7『定本平出修集1』春秋社
に収録）○葛西善蔵「新刊批評」-*短編集
『誘惑』-『奇蹟』（昭50・6『葛西善蔵全集
3』津軽書房に収録）

- 1915 (大4) 2月○田村俊子「一月の創作壇」－*「二少女」－『新潮』
- 1916 (大5) 1月「広津和郎評論」－*「餌食」－『洪水以後』 3月○加能作次郎「江馬修の『山寺』」『文章世界』 ○「新進十家の芸術」『新潮』 4月○直井泰三「江馬修氏に送る」全 10月○川瀬桂水「江馬修君を推す理由」全 ○藤沢せいじ「江馬修氏を推す」全 11月『『受難者』の批評』(和辻哲郎・赤木桁平・谷崎精二・福士幸次郎)全 ○「偽善か無知か」－*「脱却」－『世界新聞』(未見)
- 1917 (大6) 1月○広津和郎「江馬修氏を論ず」『新潮』 ○北島ひろし「江馬修氏に呈する書」『文章世界』 5月○「新進八家の印象－(四)若き僧－江馬修氏(三木生)」『文章倶楽部』 11月○広津和郎「江馬修氏の『暗礁』を読む」(『広津和郎初期文芸評論』昭40・8講談社 所収－初出未見－) 12月○広津和郎「凡庸を憎む」－*『暗礁』－『時事新報』21・23・25・26・27日(『作者の感想』大9・3 聚英閣 収録)
- 1918 (大7) 1月○柴田勝衛「江馬修氏に与ふる書」『新潮』 5月「新進作家十五氏の文章を評す(⑫江馬修氏の文章)」全 ○「江馬修氏に対する公開状」▽藤森淳三「理知に発した愛」▽岡野要吉「凝視の必要」▽相田夢南「自ら知ること」▽志賀匠平「二つの道」全
- 1919 (大8) 5月○久保正夫「『不滅の像』を読む」全
- 1920 (大9) 2月○広津和郎「創作月旦」－*「夜霧」－全 ○藤森淳三「代表的悪作二編」－*夜霧－『サンエス』 5月「小説家のニセモノ」(一)～(三)『岩手日報』25・26・27日
- 1925 (大14) 8月「文壇運命判断」『不同調』 12月○中浜鉄「牢獄の反響」『文芸戦線』
- 1926 (大15・昭1) 1月○中浜鉄「牢獄私信」『文芸戦線』
- 1927 (昭2) 3月○土岐善麿「洪民村の半日」『春帰る』人文会出版部
- 1928 (昭3) 10月○「同志の叫び」(江馬某に－白井市郎)『文芸戦線』
- 1931 (昭6) 3月○橋本英吉「二月の成果(月評)」－*「きよ子の経験」－『ナップ』 ○鍋山貞親「文学について」－*「焦熱地獄」－・杉本良吉「演劇時評」－*「抗議」－『ナップ』 4月○中野重治「小説 活動写真 ハリコフ会議」－*「きよ子の経験」－『中央公論』 9月○蔵原惟人(筆名谷本清)「芸術的方法についての感想」－*「きよ子の経験」－『ナップ』
- 1935 (昭10) 12月「日本民俗学講習会速記録」『日本民俗学研究』岩波書店
- 1936 (昭11) 6月○吉田孤羊『啄木写真帖』改造社(昭27・8乾元社 昭29・9芳賀書店より再刊) 11月○佐藤義亮「出版おもひで話」『新潮社四十年』新潮社
- 1937 (昭12) 10月○高見順「こうじゅ取り」青眼白眼四『人民文庫』(昭49・1『高見順全集19』勁草書房に収録) ○志見正次『明治初期に於ける高山県の政治学的研究』(昭42・4 飛騨郷土学会より再刊・初出未見) 11月○甲野勇「遺物用途問題と編年」『ひだびと』
- 1938 (昭13) 1月○八幡一郎「先史遺物用途の問題」・吉田富夫「考古学研究所感」全 3月○杉浦健一「物質文化研究の歴史と理論」全 6月○郁達夫「愛恋日記」－*『追放』－(『同行者』小田嶽夫訳 竹村書房) 9月『『山の民』第一部を読んで』(吉屋信子・秋山耕作・藤森成吉・八幡一郎・加能作次郎・荒垣秀雄など十数名)『ひだびと』 10月○吉田富夫「考古学の真使命」・秋山耕作「ひだやまだより」『ひだびと』 12月○宮本常一「農民文芸の展開」全
- 1940 (昭15) 5月○岩倉政治「『山の民』を読んでその1・その2」全 6月○古川良範「新しき歴史文学『山の民』を読んで」全 7月○福田夕咲「『山の民』を頌ふる言葉」全
- 1941 (昭16) 1月○黒島伝治「小豆島だより」－*『山の民』激賞－(作者宛私信)全

- 1942 (昭17) 12月○江馬嵩『『案山子』と喜多座について』全
- 1943 (昭18) 5月○利倉幸一「高山芸術座について」全
- 1949 (昭24) 12月○「江馬修氏『山の民』出版記念会『アカハタ』(22日) ○「革命の青春讃う」全(26日)
- 1950 (昭25) 3月○井上清「本格的歴史小説への先駆」『アカハタ』20日
- 1951 (昭26) 1月○なかのしげはる「人民文学と江馬の言葉」『新日本文学』○藤森成吉「分派」『人民文学』○1～2月中野重治「写しもの」(1)～(2)『人間』2月「雑誌『人民文学』に対するわれわれの態度」新日本文学会常任中央委員会『新日本文学』3月「われわれは考える『人民文学』と分裂主義について」(藤井良蔵・はやしかずお・湊知二・藤野菊治)全○塚本雄作「課題は何かー『新日本文学』と『人民文学』の問題」全4月○平野謙「消えぬ痣」『文芸』5月「人民文学編集部へ答える」『新日本文学』6月○なかのしげはる「嘘と文学と日共臨中」全8月「民主主義文学運動の統一・強化のためにー『人民文学』への呼びかけ」新日本文学会常任中央委員会全9月○豊田正子『『山の民』解説』角川文庫11月○小泉みち子『『新日本文学』と『人民文学』について』・島田政雄『『人民文学』の一年』・野間宏「照りかがやく光」『人民文学』
- 1953 (昭28) 8月○松村梢風「佐藤義亮伝」ー*『受難者』ー『佐藤義亮伝』新潮社12月○きだかおる「江馬修の『山の民』について」『人民文学』11・12合併号
- 1954 (昭29) 3月○淡徳三郎「日本国民文学の誇り」『新協劇団パンフレット』7月○色川大吉「脚色劇のドラマトルギイ 新協劇団公演『山の民』について」『テアトロ』○尾崎宏次・戸板康二「対談・新劇の春季騰勢(『山の民』新協劇団他)『新劇』9月○堀江英一『明治維新の社会構造』ー*『山の民』ー有斐閣
- 1956 (昭31) ○杉浦明平『山の民』評『読書と生活』5(未見)9月○福原麟太郎「命なりけり」ー*『受難者』ー『文芸春秋』(『福原麟太郎著作集6』に収録)
- 1958 (昭33) 5月○小宮山量平「『定稿山の民』出版について」(全 第一部あとがき)理論社○全しおりく山の民評>杉浦明平・井上清・黒島伝治他6月○全 第二部しおりく山の民評>藤間生大・井上清他8月○全 第三部しおりく山の民評>さねとうけいしゅう・杉浦明平・呉力生(中国)他9月○全 第四部しおりく山の民評>藤間生大・高島善哉・豊田正子・小宮山量平「刊行をおえて」
- 1959 (昭34) 7月○豊田正子『『綴方教室』の私は死んだけれど』『婦人公論』
- 1960 (昭35) 3月○紅野敏郎『『LA TERRE』ならびに『ヒト』について』『京華春秋』9月○本多秋五『『白樺』派の文学』『新潮文庫』
- 1961 (昭36) 3月○小田切秀雄「民主主義文学運動の分裂ー『新日本文学』と『人民文学』ー」『講座日本文学史5』大月書店
- 1963 (昭38) 4月○満田郁夫『『夜明け前』試論』『クロノス』
- 1964 (昭39) 9月○大岡昇平「歴史小説に現われた農民」『文学界』
- 1966 (昭41) 2月○小宮山量平「『定稿山の民』二刷のしおり」理論社3月○本多秋五『物語戦後文学史(全)』ー*『人民文学』ー新潮社
- 1968 (昭43) 8月○宮本常一『民俗学への道』未来社○大岡昇平『『山の民』解説』『全集・現代文学の発見12』学芸書林
- 1970 (昭45) 1月○海野金一郎「飛驒の思い出」『文芸東北』
- 1971 (昭46) 4月「逍遙・草平・孝作・修・信夫ー岐阜出身作家(五人展)への案内」岐阜古書同人会9月「文学にみるふるさと(7)ー江馬修・高根村」『朝日新聞』飛驒版(4日)

1973 (昭48) 3月○大岡昇平『江馬修作品集1・2 山の民上・下』解説 北溟社 ○「出版展望－江馬修作品集－」『毎日新聞』(9日) 4月○尾崎秀樹「維新直後の一揆－40年以上かけた大作『山の民』上下」『サンケイ新聞』(30日) ○「江馬修氏の近況－作品集(全9巻)を有情出版－* (4巻で中絶)－『岐阜日日新聞』(24日) 6月○嶋村利正「飛驒の国の悲劇を描く－『山の民上下』－」『日本読書新聞』(11日) 7月「東海政治史⑩飛驒のナポレオン－梅村騒動－」『朝日新聞』東海総合版15日(昭50・2『明治・東海政治史』朝日新聞名古屋社会部 六法出版社に収録) ○「愛する人の不滅を願う」『朝日新聞』(24日) 10月○羽仁五郎『「受難者」の印象』・君島善次郎「配本のお知らせ」『江馬修作品集4 受難者他』しおり 北溟社 11月『「山の民」書評』『歴史研究』

1974 (昭49) 3月○天児直美『「ひろい世の中」刊行にあたって』『ひろい世の中』1 4月○中西悟堂「老作家江馬修氏と山本有三のこと」『人間連邦』(昭55・12『かみなりさま－わが半生記』永田書房 に収録) 5月○菱村正文「梅村騒動と梅村速水」『歴史研究』 6月○海野金一郎「作者の横顔」『ひろい世の中』2 8月○大岡昇平「江馬修『山の民』」『歴史小説の問題』文芸春秋 9月○二本宏二「再会」・天児直美「後記」『ひろい世の中』3

1975 (昭50) (1月23日 江馬修没)

1月○色川大吉「歴史小説の流行をめぐって」『朝日新聞』(6日) ○〈江馬修追悼記事〉『岐阜日日新聞』(24日)『朝日新聞地方版』(24日) 2月○清水卯之助「啄木と江馬修」『岩手日報』夕刊(3日) ○「江馬修の遺産を郷土に」『中日新聞』(18日) 3月○霞好夫「江馬修作品の概念」『岐阜日日新聞』(8日) ○さねとうけいしゅう「おとむらいのことば」・君島善次郎「弔辞」・天児直美「あとがきと江馬修略年譜」『ひろい世の中』4 追悼号 ○『大岡昇平対談集』講

談社 4月○「特集 江馬修先生を悼む」『飛驒作家』 5月○宮本顕治「離反者たちの共産党論議」『文化評論』(昭58・5『わが文学運動論』新日本出版社に収録) 6月○田口義紀「社会派文学に傾倒－江馬修」『岐阜日日新聞』(9日) 9月○松島栄一「江馬修『山の民』－変革の記録としての歴史文学」『歴史文学』 11月○霞好夫『「山の民」文学碑に寄せて』『岐阜日日新聞』(4日)

1976 (昭51) 1月○「並木秋人手稿より抜粋」・長倉三郎「赤木清さん」・天児直美『「通信」と江馬修著作目録』『ひろい世の中』5 ○天児直美「江馬修とふるさと」『岐阜日日新聞』20日～昭55年4月25日まで134回連載 ○3月～6月小鷹ふさ「江馬修先生の思い出」①～③『飛驒春秋』 4月○天児直美「江馬修『山の民』記念碑第一号に寄せて」『飛驒作家』 ○杉浦明平『「土とふるさとの文学全集9」－〔本郷村善九郎〕－解説』・森山啓「江馬修さんに関する断片」全月報 家の光協会 6月○菊池昌典「歴史小説とは何か」『展望』 ○色川大吉『療原の声－民衆の起点』筑摩書房 8月○尾崎秀樹『歴史文学論』勁草書房

1978 (昭53) 1月○芳賀登『幕末国学の展開』塙書房 2月「江馬修と飛驒の考古学」塚田光・小山勲・武井則道『どるめん』 3月○木山英雄『北京苦住居庵日記－日中戦争時代の周作人－』筑摩書房 6月○菊池昌典・尾崎秀樹「連載対談＝歴史文学を斬る・江馬修『山の民』とプロレタリア作家たち」季刊『歴史と文学』 ○「不死鳥の生命力・『山の民』一角川文庫版を濃飛文庫として復刻」『岐阜日日新聞』(26日) 10月○本多秋五「歴史小説論の一齣」『明治大学人文科学研究所文化講演集第二集』 ○豊田正子『「綴方教室」その後の変転人生』『婦人公論』

1979 (昭54) 10月○菊池昌典『歴史小説とは何か』筑摩書房 12月○中山和子「明治維新と歴史小説－江馬修『山の民』論」・深江浩「歴史文学論の系譜」『日本文学』

1980 (昭55) 3月○尾崎秀樹・菊池昌典『歴史文学読本』平凡社 6月○本多秋五『歴史小説論の一齣』『すばる』 11月○宮本顕治『宮本顕治文芸評論選集Ⅰ あとがき』一*『きよ子の経験』新日本出版社

1981 (昭56) 2月○天児直美「江馬修七回忌に思う」『岐阜日日新聞』(2日) 11月○都竹清隆「『山の民』を語り継ぐために」『岐阜日日新聞』(23日)

1983 (昭58) 1月○永平和雄「江馬修の初期小説」『岐阜大学国語国文学』(5月『飛騨作家』に転載) 3月『糠塚遺跡発掘調査報告』高山市教育委員会 10月○滝藤満義「江馬修『人及び芸術家としての国木田独歩』解説」日本図書センター

1984 (昭59) 3月○芳賀登「『夜明け前』の実像と虚像」教育出版センター 10月○佐藤静夫「『日本プロレタリア文学集16』解説」新日本出版社 ○松井幸子「ふるさとと文学」⑧～⑩—江馬修の『山の民』『中日新聞岐阜県版』21日・28日・11月11日 10月○天児直美「江馬修と改作について」『郷土研究 岐阜』

1985 (昭60) 3月○永平和雄「江馬修論—『山寺』まで」『岐阜大学国語国文学』(5月『飛騨作家』に転載) 4月○天児直美「中西悟堂と江馬修」上下『岐阜日日新聞』27日・5月4日 7月○豊田正子『花の別れ—田村秋子とわたし』未来社 9月○天児直美『炎の燃えつきる時—江馬修の生涯』(付・江馬修年譜)春秋社 ○「小特集・江馬修の人と文学」(大岡昇平・尾崎秀樹・早般ちよ・永平和雄)『春秋』8・9合併号 ○「江馬修没後十年記念集会(9月22・23日)関係」『岐阜日日新聞』3/22・9/16 『中日新聞』4/13・9/16 ○霞好夫「いま、なぜ江馬修か」『岐阜日日新聞』9/13 ○鳳紫郎「炎の燃えつきる時」『津山朝日新聞』9/26 ○「よみがえる江馬文学—水戸藩士梅村速水描いた『山の民』」『茨城新聞』5/22 その他毎日・読売・朝日各飛騨版『高山市民時報』『飛騨日乃出新聞』など

10月○丸山静・小説評論「天児直美『炎の燃えつきる時』」『朝日新聞』夕刊「東海文芸展望」欄(9日) 11月○天児直美「『山の民』上下 後記」春秋社(底本冬芽書房版) 12月「よみがえった江馬文学—売行き好調の『山の民』」『岐阜日日新聞』(16日)

1986 (昭61) 1月○鈴木茂乃夫「『山の民上下』を読んで」『茨城新聞』(20日) 2月「特集・江馬修記念集会(没後十年)」『飛騨作家』 3月「小特集・『山の民』と『炎の燃えつきる時』」(天児直美・川島和子・谷口明・霞好夫・三木房子)『鹿嶋史叢』 ○森瀬一幸「沼田家文書にみる梅村速水と騒動」『岐阜県歴史資料館報』 10月○小林義忠「水戸藩士・梅村速水伝」『水戸史学』 11月『飛騨の縄文時代』高山考古学研究会

1987 (昭62) 2月○永平和雄「『受難者』論」『椋山女学園大学研究論集』 6月「南飛騨の夜明」『萩原町史』第3巻 岐阜県萩原町教育委員会 7月○和仁市太郎「或る作家の周辺」『飛騨春秋』 8月○高岡陽之助「国立双蝶記」一*『花の別れ』と『炎の燃えつきる時』の批較—『旗』

1988 (昭63) 1月「水府異聞93・97」『新しいばらぎ新聞』(29日) 6月○大江志乃夫「富国強兵の時代」『世界』臨時増刊 7月○中山和子『昭和文学の陥穽—平野謙とその時代』一*『きよ子の経験—武蔵野書房』 11月○小林誠一(義忠)「飛騨国梅村騒動の一端」『鹿嶋史叢』 ○尾崎秀樹「江馬修の文学再評価を」『朝日新聞』夕刊(24日)

1989 (昭64・平1) 1月○天児直美「江馬修『飛騨百姓騒動記』後記」・天児直美『魔王の誘惑—江馬修とその周辺』共に春秋社 ○西村宏一「いま大原騒動とは」上下『岐阜新聞』(24・25日) 2月○永平和雄「江馬修論—『暗礁』『国木田独歩』『不滅の像』」『椋山女学園大学研究論集』 ○天児直美「『飛騨百姓騒動記』出版について」『岐阜新聞』(1日) ○虎澤勇治「魔王の誘惑」上下 全(10・11日) その他「江馬修生誕百年

- 記念行事関係記事> 多数 3月○吉目木晴彦「江馬修『山の民』と私」『東京新聞』『中日新聞』夕刊(11日) ○『文学・飛驒の風景』岐阜県高等学校国語研究会 ○『萩原の維新と梅村騒動』萩原町発行 6月○永平和雄「『血の九月』解説」『民涛』(在日季刊) 9月○天児直美「全 あとがき」『民涛』 8月○永平和雄「混迷の時代・大震災前後ー江馬修論のうち」『幻野』 ○高橋揆一郎『えんぴつの花』ー*「豊田正子論」一文芸春秋 10月○天児直美「江馬修『羊の怒る時』解説」影書房 ○天児直美「江馬修『一作家の歩み』解説と年譜」近代作家研究叢書65 日本図書センター 11月○吉目木晴彦「江馬修の再評価」『新潮』 ○藤間生大「『羊の怒る時』を読んで」『岐阜新聞』(28日) 12月○永平和雄「江馬修論ー『羊の怒る時』と『追放』ー」『椋山女学園大学短期大学部20周年記念論集』 ○吉目木晴彦「現代小説の方法としての『山の民』『民涛』」
- 1990(平2) 2月○大津忠・小林義忠共編『水戸藩士梅村速水伝』梅村速水顕彰会 3月○天児直美「江馬修『羊の怒る時』をめぐって」『記録』 ○「名作再訪 江馬修『山の民』」『中日新聞』(4日) 4月○石牟礼道子「存在の根底を照らす目ー『羊の怒る時』『群像』 ○「デマ、流言のおそろしさ『羊の怒る時』『朝鮮画報』 5月○「新人作家33人の現在ー吉目木晴彦『山の民』について」『文学界』 10月○永平和雄「江馬修のプロレタリア文学」『幻野』 11月「インタビュー：瀬川さんに聞く(その1)」ー*江馬修と『ひだびと』についてー『じゃがいも通信』 ○天児直美「江馬修『羊の怒る時』雑感」『黙示録』
- 1991(平3) 2月○吉目木晴彦「授けられた種」『群像』 7月○吉目木晴彦「全体小説の傑作『山の民』」・『『山の民』梗概』『日本名作文学館』広済堂出版 10月○芳賀登編『山の民の民俗と文化』雄山閣 12月○藤田寛「江馬修『山の民』について」『水戸評論』 ○永平和雄「江馬修と演劇ー戦中のある地方演劇運動」『名古屋芸能文化』
- 1992(平4) 2月○永平和雄「『山の民』序説ー初稿と自家版(第一部)」『椋山女学園大学研究論集』 3月○藤田寛「水戸脱藩士の運命描く」『茨城新聞』(15日) 9月○座談会「歴史と文学ー『山の民』と梅村速水」『水戸評論』 11月○梅山秀幸「『山の民』と両面宿儺」『岐阜経済大学研究所報』
- 1993(平5) 2月○永平和雄「『山の民』序説ー初稿と自家版(第二部)」『椋山女学園大学研究論集』 6月○高島俊男「おれはひとりの修羅なのだ」ー*「炎の燃えつきる時」ー『しにか』(平7・2 全『本が好き、悪口言うのはもっと好き』大和書房 平10・3 全文春文庫に収録) 9月○山本芳明「終わりのない結末と終われない物語> 江馬修『受難者』をめぐって」『文学』 11月○吉目木晴彦「終わりなき改作」『朝日新聞』夕刊東京版(5日)・全「江馬修の長篇『山の民』『中日新聞』夕刊(13日) 12月○永平和雄「『山の民』(自家版第三部)を読む」『幻野』
- 1994(平6) 3月○永平和雄「江馬修と『山の民』」『金城国文』 ○全「『山の民』第一部ー自家版から冬芽書房版へ」『金城大学論集国文学編』 4月○山腰武司「江馬修の作品と現代」『飛驒春秋』 ○上條宏之「『夜明け前』と『山の民』『郷土研究岐阜』 6月○宇田川昭子「江馬修の白石実三宛未発表書簡」『花袋とその周辺』20号
- 1995(平7) 3月『水戸藩・尊王の志士梅村速水の足跡をたずねて』梅村速水顕彰会 ○『江馬修蒐集品図録』高山教育委員会 8月○永平和雄「江馬修の『山の民』復権のために」『岐阜新聞』(3日) 11月○永平和雄「『山の民』第二部ー自家版から冬芽書房版へ」『幻野』
- 1996(平8) 3月○永平和雄「『山の民』第三部ー自家版から冬芽書房版へ」『金城大学論集国文学編』 4月○増山太助「戦後運動史外伝・人物群

像⑩—高倉輝と江馬修『労働運動研究』 7月
○芳賀登『民衆と歴史の視点—戦後歴史学を生きて』雄山閣

1997(平9) 4月○吉目木晴彦『『山の民』上下書評』『中国新聞』(12日) (『春秋』7月号に転載)

6月『梅村速水の生涯』増補版 梅村速水顕彰会

8月○吉目木晴彦「本音のコラム(この一冊)」—
『山の民』—『東京新聞』(25日) 9月○吉目
木晴彦:スコット・シュネル「対談:江馬修と
『山の民』をめぐる」『春秋』

1998(平10) 1月○対談・佐高信:色川大吉「司馬
遼太郎批判」『世界』 5月○猪瀬直樹『マガジ
ン青春譜』小学館 11月○山本芳明「慰めの女—
江馬修『受難者』の時代—」『日本文学』

1999(平11) 6月○天児直美「初活字の作品は“山
林”」『岐阜新聞』(21日) ○佐高信『司馬遼太
郎と藤沢周平』—『山の民』—光文社 8月「ひ
だびとのあしあと」飛騨教育史学会編 岐阜
新聞社出版局 ○熊谷文雄「江馬修『山の民』
『らびす』 9月○永平和雄「『山の民』第一
部—冬芽書房版から理論社版へ—」『幻野』

2000(平12) 2月○永平和雄『江馬修論』おうふう

江馬修作品に関する海外の動き

1) スコット・シュネル(米国アイオワ大学助教授)
の江馬修に関する発表

1996年11月24日「民族誌としての小説—日本の歴史小
説における異文化衝突と政治的抵抗」於:サンフ
ランシスコ アメリカの人類学会

1997年5月14日「民族誌としての歴史小説—江馬修の
『山の民』における異文化衝突と政治的抵抗」於
東京・明治大学 ○12月6日「民族誌としての小
説—小説と称する作品における民族歴史的な事
実」於:オハイオ州 クーブランド市 ジョウン
カロール大学(いずれ一冊の本にまとめられる予
定)

2) 江馬修作品の中国語訳について

江馬修作品は1918年12月「小小の一個人」(幼い子)

周作人訳『新青年』をはじめ、『山の民』『氷の河』
など、相当数訳されている。高島俊男氏(中国文学
者)によると「中国で一番愛読されている日本の作
家」⁷⁾だそうであるが、只今調査中である。

あとがき

筆者が江馬の資料収集をはじめたのは、江馬の生前
からであった。最初のノートに、昭48・4・15と記し
ているから、30年近い。昭和50年1月に江馬が死去
し、翌年から「江馬修とふるさと」と題して、『岐阜
日日新聞』に思い出を連載した。その時以来、筆者の
文献収集は本格的になってきた。「私が伝えねば誰が
伝える」と言った、一種の使命感もあったと思う。

「江」「馬」「修」の三字は特別に筆者の目に飛び込ん
できた。生き埋めにされていた江馬の作品が、「早く
掘り出してくれ!」とあちらからも、こちらからも叫
んでいるかのようにであった。その間に、日本近代文学
館の倉和男氏(現 神奈川近代文学館理事)をはじ
め、実に多くの方々の協力をいただいた。江馬は自叙
伝『一作家の歩み』の中で、この自叙伝を書いた動機
の一つとして「生涯をかけて私の文学的努力に対する
冷ややかな無関心、いじ悪い黙殺、しつこい敵意」⁸⁾へ
の抵抗をあげている。反面「私は自分の長い作家生活
の経験によって、自分の作品の愛読者、支持者が決し
て少なくないことを感知している、もしそのような層
がなかったら、ずっと前に生活は破綻して、ペンを投
げざるを得なかったであろう」と記している⁹⁾。

今回、「著作年表」と「参考文献目録」をまとめて
みて、改めて、この江馬の言葉の裏付をとった思いが
する。真に命ある作品は、どんなに生き埋めにされよ
うと、どこかで、誰かによって、読み継ぎ、語り継が
れているということである。江馬修のもので、まと
まったものとしては、初めてのものであり、間違い
や、見落としも多々あると思われる。お気付きの点、筆
者までご連絡いただけますれば幸甚です。

本稿編集にあたって、江馬修研究者・永平和雄氏
(元岐阜大教授 国文学)のご助言とご協力をいただ
きましたことを深謝致します。

引用文献

- 1) 松村梢風「佐藤義亮伝」『佐藤義亮伝』新潮社（昭28・8）p.204～206
- 2) 黒島伝治「小豆島だより」『ひだびと』（昭16・1）p.34
- 3) 江馬修遺稿「羽仁五郎と江馬の小対話」『ひろい世の中』No.4（昭50・3）p.1～5
- 4) 大岡昇平『歴史小説の問題』文芸春秋（昭49・10）p.117～195, p.212
- 5) 吉目木晴彦「書評抄・山の民上下」『春秋』（平9・7）p.38
- 6) 天児直美『炎の燃えつきる時－江馬修の生涯』春秋社（昭60・9）参照
- 7) 高島俊男『本が好き，悪口を言うのはもっと好き』大和書房（平7・2）p.215
- 8) 江馬修自叙伝『一作家の歩み』日本図書センター（平1・10）p.296
- 9) 全 p.298